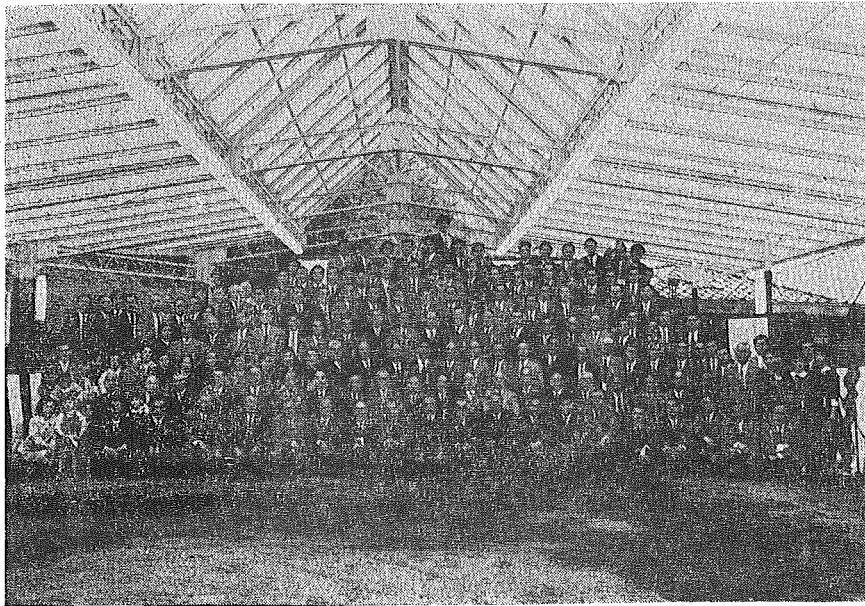


洛友会々報

京都市左京区吉田
京都大学工学部
電気科教室内
洛友会

第七回 本部総会

記念写真



洛友会関西支部 家族遠足会

目も覚めるような洛外の新緑を探勝すべく、五月二十五日(日)に家族同伴の遠足会を催した。

午前十時京都駅東口広場に集合、老親、奥様、令息令嬢合せて約八十名は二台のバスに悠々座席を占め、東山通を経て円山公園、智恵院境内を過ぎ三条通に出て蹴上、九条山を左に見て山科に至り、先づ醍醐三寶院を訪づれた。由緒ある名苑は満る如き緑を庭池に反映して一層の美しさを誇っていた。

それより車は一路南へ向ったが、時恰も茶摘時にて姉様かぶりの娘さん達の茶摘唄を伴奏にいつしか黄檗山万福寺に着いた。本寺に隠元和尚の開山でいわゆる黄檗宗の本山であり、建築、造園の様式凡てが支那式であり、案内僧の解説も時に支那語を交えたものであった。

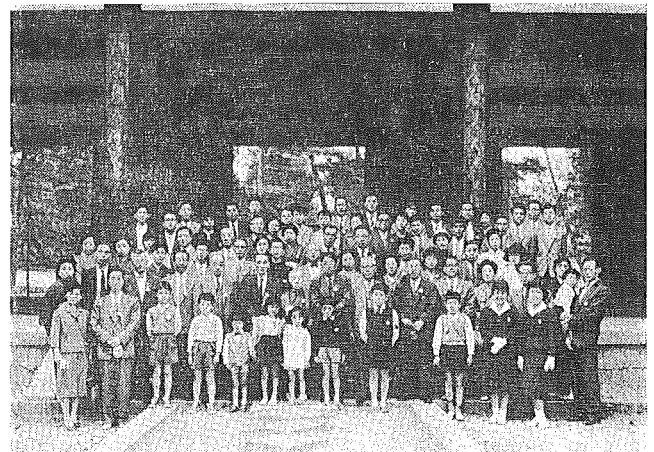
正午過ぎに宇治に着き、お馴染の花屋敷浮舟園が宇治川に沿うて新らしく建築したまことに見晴らしのよい会場で昼食をしたためた。

午後は復旧される平等院鳳凰堂を三々五々見物した。一方、今田支部長の御厚意により抹茶席の接待を受け、まことに長閑な気分を満喫し得たことを感謝します。

午後二時過ぎ帰路につき、宇治川左岸を下り巨椋池の干拓地の真中を走る奈良街道をつつ走って観月橋に出で伏見稲荷を右に見て三条京阪にて午後四時過ぎ解散した。

出席者(上の数字は同伴者数)

- 上林 一雄(大6) 山村忠行(大6)
- 加藤信義(大7) 宮崎佐加枝(大7)
- 2 林 堅太郎(大9) 大山駿介(大11)
- 藤田 誠治(大12) 2 西枝一江(2)
- 3 木津 圭蔵(大14) 上林 明(3)



関西支部家族遠足会

私の健康長寿法

伊藤 忠雄

ここで健康長寿法とは私独特の言葉かも知れないが、昔から一病長寿

- 2 千本木安次郎(2) 山本 茂雄(6)
- 田中 武夫(5) 3 和田 昌博(7)
- 福岡 正(6) 2 塩見 武夫(8)
- 4 国本 貞三(7) 大塚 順文(9)
- 4 萱島 満(9) 3 小林 秀正(10)
- 3 林 千博(9) 2 森 元行(11)
- 2 中堀 孝志(10) 4 大谷 泰之(13)
- 2 鈴木 重次(11) 3 寺西 謙三(24)
- 4 西村正太郎(16) 2 東 暉久(25)
- 中山 清光(25) 大沢 謙一(29)
- 西内 敏(29) 服部 重幸(32)
- 2 藤田 惟之(32) 有村 武士(32)
- 橋本 安雄(32) 伊藤 貞男(32)
- 中尾 孝(32) 安藤 和昭(32)
- 森 匡明(32) 八木 晋一(33)
- 西台 悼(32)

私には八十才を超し、而も超人的な馬力を持つ活動家にお会いする毎に、健康監理を聞くのであるが、健康と職業との間に不離密接の因果関係があることを断言してはばからない。

といわれている一病の養生よろしきを得て長寿を保つたのとは正反對に死のほんの少し前まで若々しい健康を保有する活動的な長寿法をいっているのである。私は辰年生、五十四才未だ大先輩からいえば若輩の類であるが、ぼつぼつ会社を停年退職を余儀される友人があつたり、昔は人生五十年、今は六十五才と平均寿命が統計的に出て来ると、あなたが若輩とはいえないのである。それだけに、最近では長

私は四十台は未だ全身の筋肉を老衰させてはならないし、五十台は足の筋力を温存し、六十台は徐々にが脚力を弱め、七台は山位は平気で登山する馬力がなければ七十才は確心を持つてないと思う。

数年前ミヤコホテルの故田中博翁が八十八才の時に、八瀬のお宅に伺ったことがある。翁はその時、「私の長寿は六十才頃登山のケール建設の為め、毎日一度は頂上まで登らねばならなかったのに原因がある」と断言されたし、東京のある婚礼の席で、五年前、北海道の七十六才の町村敬貴氏(元貴族院議員参議員)に会った。

氏は北海道の泥炭地帯開発研究のためヨーロッパ出張から帰着された許りで、一見六十才位の健康体としか見えぬ若々しさで、その二十四貫の巨体健康維持法を伺って見た。曰く六十才位まで若い牧夫と労働をともにしたこと、毎日牛乳を六合位飲用していることに原因があると。

人間の血液は、静かな仕事に従事している時は、全量の二五乃至三〇%がエネルギー発生に協力し、残余は蔵血管に停止していることは今更いまでもないが、時々全血液を新鮮な空気に触れしめ、蔵ざらい虫干しすることは長寿を保つために絶対必要であらうことは田中翁の言葉から汲取れる。

昨今はゴルフが特に盛んになって来た。これも他の運動競技とともに血液を蔵ざらい虫干すいい運動だと思ふが、五十才を過ぎて次第に衰えを見せる肉体を支えるためには、余程の実践力がない限り継続でないで中絶して終うのが落ちである。その他テニス、登山なども適当な運動であるが、継続的に実践する人はすくない。その原因は衰え行く肉体を駆使することが精神的に苦痛を伴うからである。

脚力を温存し、且つ血液を徐々に蔵ざらいして新鮮な空気に触れしむる方法に、登山が最も良いことは万人の認むるところであるが、これを実践的に継続を余儀なくせしむる方法として私は海抜八百米前後の高山に植林を始めたのである。即ち五、六年前から愛宕山の頂上の北側の持山に杉植の植林を始め、現在では五万本許り植えて終った。最初は大変なことになったと後悔したのであるが、毎年、草刈り補植などの費用は莫大であるけれども、年々成長する楽しみは格別であるばかりでなく監督のため、登山を月に四回位余儀なくされるので、血液の蔵ざらい清浄化は必然行われ、此頃では本当に良いことをしたと思つてゐる。一回の登山で自宅まで五日間位はさすがに良い気持ちで健康を喜ばしてくれぬ。猶ほ杉植のような長年金目を見ないもの以外に最近九重桐、ユーカーを試験している。

今日この程度の高山の植林は経済的に引合ぬとされているが、私は叙上の理由で強行し、来年からは独自のな機械力利用で経済性を実認し且つ年々五町程度の開発を試みたいと思つてゐる。日本に保有する高さ八百米乃至千米位の未植林地面積は広大なもので、人力のみによつての植林は経済性が乏しいに依りて機械力に依存すれば敢て困難でも無いと考へて興味深いものがある。

要するに私の山林経営は第一に自身肉体を駆使して健康長寿を獲得すること、第二に経済性に乏しい高山地帯の植林を敢行して経済性を実証する機械技術的経営法を完成し日本の未開発高山地帯を開発する見本を提示するなど尽きぬ夢、測り知れない興味、喜びに満ちてゐる。

(昭五卒伊藤理化学研究所長)

九州支部便り

新緑かおる五月上旬、博多において二十五年振りの電気学会が開催されました。この機会に各地からお集りの洛友会々員の方々と懇談の機会を得たいと考へていまして、五月三日の電気学会懇親会の直後、電気ビル地階グリルで加藤先生および熊谷先生をはじめ二十四人の方々と楽しい一時を過ごす事が出来ました。

電気学会に出席された方々への連絡の方法が思うにまかせず、初めて博多においでになつた方々は色々とお計面も多く多数お集りいただけませんでした。支部総会の際にはお目にかかれぬが、支部総会の際にはお各地における皆様の御活躍の御様子をお目にかかれぬ程の出来栄とばかり残念です。

出席者は次の通りでした。(洛友会九州支部幹事)

- 高柳与四郎(大3) 加藤信義(大7)
- 巽良和(大13) 脇山俊一(大14)
- 宮田秀介(大15) 熊谷三郎(昭2)
- 岡本督(昭4) 松井貞信(昭5)
- 足立斌(昭6) 前田憲一(昭7)
- 加来誠一郎(昭11) 安田振之助(昭12)
- 大谷恭之(昭13) 福士良(昭16)
- 池上淳一(昭18) 上之園親佐(昭18)
- 近藤文治(昭18)
- 坂口忠雄(昭21) 坂井利之(昭22)
- 深町藤吉(昭22) 萩原宏(昭25)
- 田中昭義(昭25) 加子素彦(昭27)
- 上田保之(昭27)

新居浜洛友会

六月二十二日、四国支部総会に出席された松田、林(重)、林(千)三先生と本部の山村幹事を迎えて晩餐会を催した。新居浜在住の全会員の出席で非常な盛会であつた。

会費領収

昭和三十二年(第六回)	昭和三十二年(第六回)	昭和三十二年(第六回)	昭和三十二年(第六回)
三月一六日より 五月一五日まで 五月一六日まで	三月一六日より 五月一五日まで 五月一六日まで	三月一六日より 五月一五日まで 五月一六日まで	三月一六日より 五月一五日まで 五月一六日まで
荒井源三郎 渡辺 兼雄 稲垣 清明 阿部 英一 福岡 正 日野 宗雄 喜多 治夫 有馬 敏彦 大谷 泰之 藤田 和也 三竹屋 芳夫 天野 寛徳 木村 博一 田代 任 岡崎 敬 清水 尚之 森岡 昌之 山本 春也 大西 俊一 山本 茂雄 大沢 謙一 村田 幸夫 吹沢 直温 安井 貞三	荒井源三郎 渡辺 兼雄 稲垣 清明 阿部 英一 福岡 正 日野 宗雄 喜多 治夫 有馬 敏彦 大谷 泰之 藤田 和也 三竹屋 芳夫 天野 寛徳 木村 博一 田代 任 岡崎 敬 清水 尚之 森岡 昌之 山本 春也 大西 俊一 山本 茂雄 大沢 謙一 村田 幸夫 吹沢 直温 安井 貞三	荒井源三郎 渡辺 兼雄 稲垣 清明 阿部 英一 福岡 正 日野 宗雄 喜多 治夫 有馬 敏彦 大谷 泰之 藤田 和也 三竹屋 芳夫 天野 寛徳 木村 博一 田代 任 岡崎 敬 清水 尚之 森岡 昌之 山本 春也 大西 俊一 山本 茂雄 大沢 謙一 村田 幸夫 吹沢 直温 安井 貞三	荒井源三郎 渡辺 兼雄 稲垣 清明 阿部 英一 福岡 正 日野 宗雄 喜多 治夫 有馬 敏彦 大谷 泰之 藤田 和也 三竹屋 芳夫 天野 寛徳 木村 博一 田代 任 岡崎 敬 清水 尚之 森岡 昌之 山本 春也 大西 俊一 山本 茂雄 大沢 謙一 村田 幸夫 吹沢 直温 安井 貞三
五月一六日より 七月一五日まで	五月一六日より 七月一五日まで	五月一六日より 七月一五日まで	五月一六日より 七月一五日まで
美咲 隆吉 西村佳寿雄 宝来勇四郎 俵 三九郎 大塚 好造 松浦 守一 林 紀一郎 吉田 博 長川宗三郎 岩野 直美 今水 康治 山本 政男 小沢 勝 小笠原保信 安田 嘉之 岩井 壮介 山本 彬夫 本郷 式良 小原富重郎	美咲 隆吉 西村佳寿雄 宝来勇四郎 俵 三九郎 大塚 好造 松浦 守一 林 紀一郎 吉田 博 長川宗三郎 岩野 直美 今水 康治 山本 政男 小沢 勝 小笠原保信 安田 嘉之 岩井 壮介 山本 彬夫 本郷 式良 小原富重郎	美咲 隆吉 西村佳寿雄 宝来勇四郎 俵 三九郎 大塚 好造 松浦 守一 林 紀一郎 吉田 博 長川宗三郎 岩野 直美 今水 康治 山本 政男 小沢 勝 小笠原保信 安田 嘉之 岩井 壮介 山本 彬夫 本郷 式良 小原富重郎	美咲 隆吉 西村佳寿雄 宝来勇四郎 俵 三九郎 大塚 好造 松浦 守一 林 紀一郎 吉田 博 長川宗三郎 岩野 直美 今水 康治 山本 政男 小沢 勝 小笠原保信 安田 嘉之 岩井 壮介 山本 彬夫 本郷 式良 小原富重郎

東京七会
昭和三十三年八月一日
於高橋荘
吉岡俊男
松井登兵

- 一五 古賀七郎 大隈 辰生
- 一四 松井 茂 北爪 隆夫
- 一三 黒田 利夫 松本 清隆
- 一二 前田 安道 渡辺 一雄
- 一一 大橋 章男 相木 一男
- 一〇 肥後 大介 井上 大助
- 〇九 十倉 正三 川西 武
- 〇八 吉田 武彦 小原 弘
- 〇七 森本 芳夫 岡本 正敏
- 〇六 前田 藤治 石井 嵩
- 〇五 神崎 淳一 岡本 正彦
- 〇四 田中 信義 滝口 哲朗
- 〇三 一六二中山 治郎 山田 健一
- 〇二 加藤 孝一 齊藤 秀夫
- 〇一 西村正太郎 六田 猶敏
- 一七 影山 盛行 山本 幹次
- 一八 高橋 修 江見 耕平
- 一九 木村和一郎 太田 英雄
- 二〇 船橋 礼蔵 角田 寛
- 二一 藤井 亮 榎谷 績
- 二二 藤井 克人 楠本陽一郎
- 二三 岩谷 英一 荷口康一郎
- 二四 森 巖 岩波 俊夫

- 一九 伊藤 義一 大鳥羽幸太郎
- 一八 島田 重 姫井 豊治
- 一七 高木 文夫 川合 深
- 一六 木村 小一 清水 通隆
- 一五 田代 任 松本 肇
- 一四 内山 政亮 松本 肇
- 一三 守分 亨 浜崎 博
- 一二 八隅 久明 高橋 圭介
- 一一 西原 宏 上田 敏行
- 一〇 水野 勝己 増岡 健一
- 〇九 三上 謙五 池見 幸彦
- 〇八 菅沼 春幸 高橋 一二
- 〇七 深谷 通俊 高橋 一二
- 〇六 広田 方孝 大貫 良三
- 〇五 坂井 利之 村井 寛治
- 〇四 坂本 宣哉 塚本 徹
- 〇三 大塚 成吉 船越 孝夫
- 〇二 山本 孟 堀谷 守男
- 〇一 松本 忠孝 太田 勇
- 二二 須藤慶一郎 服部 嘉雄
- 二一 深井 泰 香川 正明
- 二〇 西村 尚和 神 尚通
- 一九 門野内忠幸 森田健一郎
- 一八 服部 周三 松本 次郎
- 一七 小林 久次郎 安房 淳夫
- 一六 門脇 誉雄 岡田 実
- 一五 加納 堯良 太田 実
- 一四 寺西 謙三 安藤 慶一
- 一三 白井 右友 中山 清光
- 一二 美間 敬之 萩原 宏
- 一一 戸川 一義 藤島 啓
- 一〇 森島 省三 玉井昌太郎
- 〇九 鈴木 恵雅 和泉 孝喜
- 〇八 松井 義一 松野 匡雄
- 〇七 辻野 昭夫 朝比奈 隆
- 〇六 松本 安正 久保 光男
- 〇五 猪口 敏夫 河原崎 晃一
- 〇四 林 泰夫 大泊 勝
- 〇三 芝山 繁美 中山 敬造
- 〇二 下村 信夫 中川 正憲
- 〇一 片山 犬

- 二九 武藤 良介 渡辺 義朗
- 二八 大沢 謙一 西山 節男
- 二七 桑畑 禎文 山下 義雄
- 二六 谷 貞和 長谷川利安
- 二五 水野 博哉 島原 陽一
- 二四 堀 英二 森 幹夫
- 二三 久保 洵 伊藤 利朗
- 二二 田村 勝宣 安賀 隆志
- 二一 白杉 茂 安藤 孝野
- 二〇 木村 幸男 塩田 克弘
- 一九 福川 重義 竹田 正美
- 一八 森田 克磨 奥沢 祥弘
- 一七 松枝 浩二 高橋 義造
- 一六 植田 浩二 三好 良一
- 一五 西川 芳邦 岩 原皓一
- 一四 伊吹 公夫 岸尾 裕之
- 一三 中村 皓 岡田 一彦
- 一二 難波 正行 渡辺 寿夫
- 一一 伊藤 貞男 山本 康喬
- 一〇 西台 惇 小泉 洋次
- 〇九 平栗 俊男 田中 千秋
- 〇八 堀井 信一 山崎 裕和
- 〇七 酒井 寿 北川 孟
- 〇六 福島 邦彦 中山 道夫
- 〇五 町田 修一 堂下 修司
- 〇四 潮崎 安弘 林 良一
- 〇三 大西 和夫 八木 晋一
- 〇二 林 良一
- 〇一 八木 晋一

第三回 四国支部総会

昭和三十三年六月二十一日高松に
松田、林(重)、林(千)、三先生並び
に山村幹事をお迎えし、紅羽旅館に
おいて第三回総会および懇親会を開
催した。

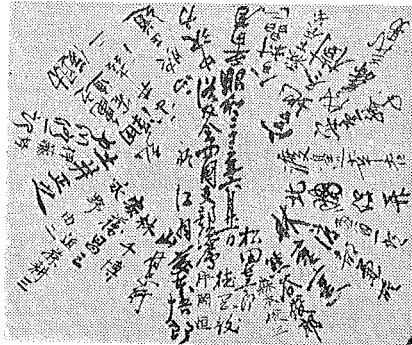
先づ総会においては三十二年度会
務、会計報を滞りなく終り、三先
生を代表して松田先生の挨拶および
林(重)先生の電気教室近況について
のお話しがあり、次に支部会則によ
り支部役員を選出を行ったが、その

方法として、四国支部最長老である
大正四年卒業の安藤昌三氏に一任す
ることとし、氏の指命によって次の
如く決定し、今後二年間本会の運営
をお願いすることになった。

支部長 渡部兼雄(天12)
副支部長 渡辺幸吉(昭3)
幹事 宮地冬樹(昭2)、北脇
保喜(昭5)、阿部要
(昭8)、伊藤努(昭8)
片岡恒(昭8)、小倉祐
(昭9)

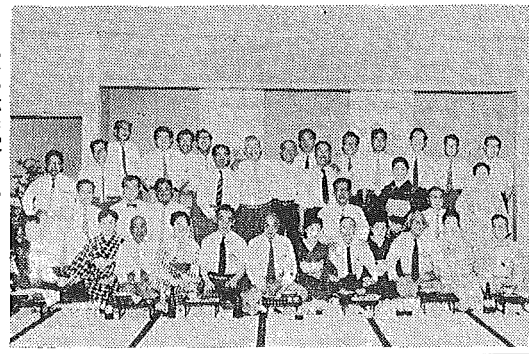
尚、次回総会開催については支部
長一任と決議された。

引続いて懇親会に移ったが、この
時山村幹事が京都より準急で駅より
直接会場へはせさんせられ洛友会近
況についてお話しがあった。



年令の差も先輩後輩の区別もうちす
て、同学の志として和気あいあい
と心ゆくばかり打興じふけゆく初夏
の夕べにかつての吉田山に遊びし若
き日の思い出にふけり、或いは情熱
を再現するなどいつ果てるとも判ら
ないほどの盛会であった。

「平田記」



四国支部総会写真説明

前列右より 弘田、林(重)先生、
松田先生、山村幹事、
林(千)先生、安藤、佐
藤

中列右より 中沢、中川、宮地、
渡辺、北脇、安堂、藤
本、土居、奥田、永野

後列右より 近藤、伊藤、平田、
西脇、平井、徳岡、深
谷、森本、今村、熊谷
森下

名簿編集用の葉書を同封しており
ます。楷書で書いて下さい。殊に数
字はハッキリ書いて下さい。